

ミシンと日本の近代

アンドルー・ゴードン 著、大島かおり 訳



■評者
大塚 明子
(文教大准教授)

日本におけるミシン導入の歴史。米国人研究者が選ぶテーマとしては、いくら日本近現代史の専門家とはいえマニアックな、と少し驚いた。が、「序論」を読んで納得がいった。確かにミシンは「三種の神器」より前、日本女性の日常生活の真ん中に入り込んできた最初の近代機械なのだ。

地域に浸透、変容する資本主義

かつて世界市場を席巻した米国のシンガー社は「初の成功した多国籍企業」だという。グローバルに拡大する近代資本主義が、各地の歴史や伝統といったローカルティとのせめぎ合いの中で、どう変容され浸透していくか。近年の人文社会学の正統テーマを論じるのに、なるほどミシンは格好の切り口に違いない。

本書を貫く縦糸は二つあり、一つはミシンを売る側の男たちの話だ。先駆的な月賦販売とセールスマンのシステムを持ち込んだシンガー社に対し、国内の雇用慣行の導入を要求して日本人従業員が広

域ストライキを起す。その動向もスリリングだが、もう一つ、ミシンの買い手である女たちの物語が興味深い。

ジョン万次郎が母への米国土産にミシンを買って贈ったが、彼女は試してみても失望した。なぜか？縫い目がきつ過ぎて「洗い張りをしてまた仕立てなおす」ということができないから！この答えには意表を突かれた。かつて日本女性は本当にまめに自分や家族の着物に手を掛けていたのだ。西洋のドレスは仕立てが難しいので、日本よりずっと早くから専門業者への外注が進んでいたという。

このように裁縫し続けた日本女性だからこそ、戦後に洋服への転換が進むと、一斉にミシンを購入して洋裁ブームを起す。これはファッション史などで説いたことがあったが、高度成長期には全国紙の婦人欄にも型紙付きで洋裁の連載があったとは知らなかった。

意外なことに、著者によれば同種の記事は米国の新聞には見当たらない。後発の日本が実は一時期世界で最もドレスメーカーのあふれる国だったとは。比較文化論でしか見えてこない真実というのはあるものだ。

(みすず書房・3570円)

